

大人になる。ということ

好きなこと、やりたいこと、学びたいこと。
なんとなくそれくらいは思いつくけど
将来の夢ははっきりしないし、
社会のために自分に何ができるのかなんてわからない。
大人でも子どもでもない中途半端な
私たちは、今何をすればいいの？
大学生になることがすべてじゃないけど、
その4年間で何かを見つけられるんじゃないかって
少しだけ期待している。
でも……本当に4年間で答えは見つかるのかな。
そうだ、先輩たちに聞いてみよう。

5人の先輩

- 01 岡田 賢斗さん (2017年度卒業予定)
- 02 赤澤 邦夫さん (2016年度卒)
- 03 安永 将太さん (2015年度卒)
- 04 江田 香織さん (2004年度卒)
- 05 萩原 直樹さん (1995年度卒)



「専門領域以外の授業で やりたいことをみつけた」

入学当初は外交官になりたいと思っていたので、国際政治を学ぼうと社会・国際学群を選びました。しかしさまざまな授業をとる中で、メディアというものに新たに興味をもつようになりました。「メディアと政治」という国際の授業で、政治とメディアとの関わりを初めて知り、そこからメディアについてより深く学ぼうと思いました。そうするうちに、自然と自分の専門の領域以外の授業を積極的にとるようになりました。そこで出会った芸術専門学群開設の「創造学群表現学類」という授業が、広告業界を志すことを決意する大きなきっかけとなりました。

「物事をいかにおもしろく捉えるか」

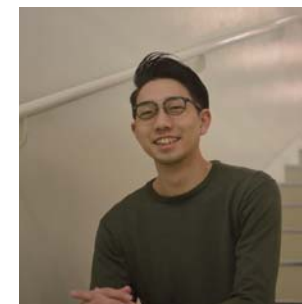
「創造学群表現学類」は、すべてが新鮮でした。ゼロから考えて生み出さなければならず、芸術専門学群の人たちに囲まれる中で、専門外の慣れないことに頭をフル回転させました。実際に大きな仕事をしている講師陣から、仕事の裏側について話を聞けるのも他にない体験でした。その講師陣の中には、自分と同じように他学類でありながら現在クリエイティブな仕事をしている方もいました。専門的に勉強していなければそういった仕事に携わることはできないと思っていたのですが、専門知識がなくとも、物事を面白く捉えたいという気持ちがあれば自分にも可能性があるのでは？と思うようになりました。授業ではソーシャルデザインチームとして活動し、プロダクトを作りました。あんなにも必死になって1つのもを上げるという体験をしたのは初めてでした。

「表現に近い仕事をしたい」

表現に近い仕事である広告代理店に就職します。まだ配属はわかりませんが、「表現」の戦略や方向性を決めることに携われる、プランナーを希望しています。また、武道を通じたコミュニケーションなど、自分特有のものを用いて勝負したいと考えています。

岡田 賢斗さん

社会・国際学群 国際総合学類 卒業
広告代理店 就職予定 (17.04-)



「グローバルな環境での成長が 自分の強みに」

都内の有名私大と比べ、筑波大学の知名度は高くありません。筑波大学の学生は、活動的というよりは地道にコツコツと動くタイプだと思っています。そのためか、あまり派手に活躍できていないのでは？という風にも感じることがありますが、筑波大学で良かったということもたくさんありました。1つは、留学生が多い環境。少林寺拳法部に所属していたので、留学生に武道を教えていました。大学生でこんなに多くの留学生、外国人に武道を教えたのは自分くらいのものだ！と胸を張って言えるほどに。面接でもここをアピールポイントにしました。文化の違う人に、自分がいいと思っているものを勧め、伝えていくための工夫。そういったコミュニケーションや信頼関係の構築はとても大切であり、今後にも必要になる力だと思っています。

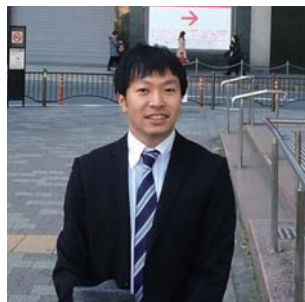
「筑波大学だからできること」

筑波大学はまだまだ他と比べて、閉じた環境にあるかもしれません。でも閉じた環境があるから、例えば終電を気にせず1つのことに打ち込むことができます。総合大学という環境から、自分のようにいるんな学びと出会うことも、留学生とコミュニケーションをとることもできます。環境を最大限に活かし、自分にしかできないことを見つけて欲しいと思います。



赤澤 邦夫さん

理工学群 社会学類 都市計画主専攻 卒業
システム情報工学研究科 社会学専攻 修了
日本郵便株式会社勤務



「田舎でも存続できる ビジネスモデルを作りたい」

これから日本の人口がどんどん減っていったら、地方にはコンビニすらなくなるかもしれません。そうなった時でも郵便局は各自治体に必ず一つは存在します。コンビニすらない、市役所と郵便局しかない……大げさですがそんな世の中になったら、郵便局は人々にとって大切な存在になるのではないかと思います。志望しました。また、田舎でも存続できるようなサービスの形を模索して、新しいビジネスモデルを作りたいという思いもあります。

「サービスについてもっと考えたい」

今は郵便局で働いているのですが、商品が売れた時が一番嬉しいですね。郵便局では、地方の果物のカタログなども売っています。お客さんにお勧めしても、購入してくれる人はあまり多くありません。しかし時々買ってくれるお客さんもいて、そういう時は「なんで売れたんだろう？」と考えたりして、考えたことを次の販売のヒントにしたりします。それと、ご年配の方々の利用が多くて、丁寧に説明するとすごく感謝してくれるので、そういう時にこの仕事をされていて良かったと改めて思います。

「筑波大学の前は違う大学だった」

前にいた大学で1年次の時に留年することになってしまったので、それならどこか受け直そうと思ってもう一度受験することになりました。筑波に来る前の大学では文系にいましたが、後期入試で文系科目が使えたことや、実際の都市で生じる経済などの諸問題に興味があったので、社会学類を受験しました。2011年の3月11日に震災があり、そのあと社会学類、比較文化学類、芸術専門学群の共同開設で「創造的復興支援プロジェクト」という授業が始まりました。自分もその授業に参加していたのですが、そこで出会った芸術専門学群の友人たちと、大学院の2年間はルームシェアをすることになりました。たまにつくばに帰りたいなあと思うくらい、とても充実した学生生活だったなと感じています。

「ほかの大学にはない程よさ」

筑波大学の一番の良さは、他の大学に行っていたからこそ感じる「程よさ」だと思います。都会過ぎない大学で、でも東京も1時間程度で行ける。変に気取らなくていい立場にいるような感じがしました。あと、筑波大学は東京から離れていて、主要な大学からも離れている……ネガティブな意味で閉鎖的とよく言われますが、その閉鎖的な空間ということが個人的にはすごく助かりました。前の大学と違い、ほとんどの学生が大学内で人間関係を多く築いている環境だったので、サークルに行けば友だちに会えましたし、そこで授業の情報をもらうこともできました。だから、閉鎖的というのがむしろ居心地の良さに繋がっていました。

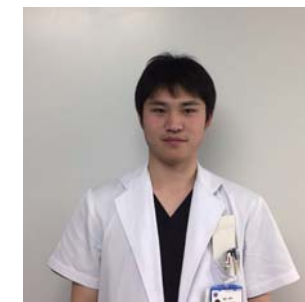
「地域住民との交流をもっと」

人口を見ると、つくば市に占める筑波大生の割合って結構大きいので、ご近所さんと関わる機会だってあるはずなのに、僕の場合、全く住民との交流はなかったなと後悔しています。郵便局員という立場から、地域の人と継続した交流をすることで得られるものは大きいと感じています。あとは閉鎖的なのも良い点だったとは思いますが、学生時代の交流が筑波大学の学生同士にとどまらずに大学の外にまで広がれば、社会に出た時に役立つとは思っています。今だからこそ、大学生のもつ可能性を感じています。



安永 将太さん

医学専門学群 医学類 卒業
筑波大学附属病院 整形外科 初期研修医



「患者さんのため、 卒業後も勉強の毎日です」

大学を卒業してからは、附属病院で初期研修医として働いています。今年で2年目になります。初期研修医は2年間と期間が決まられていて、その期間で自分が希望するさまざまな科を回り、それから専門の科を決定します。それぞれの科には受け持ちの患者さんがいて、研修医は医師と相談しながら診断、検査、治療方針を決めていきます。患者さんの退院時に感謝の言葉をかけてもらったり、手術後に患者さんの容態が回復したり……医師という職は自分のやったことが目に見えるので、やりがいを感じます。患者さんにとっては医師も初期研修医も同じ医者なので、同じ知識があると思われれることもしばしば。学生時代と同じく日々勉強しなければと思っています。病院の雰囲気は常識的な上下関係はありますが、先生方との関係性は良好です。若い人も教授になるなど、年齢は関係なく、ある種実力社会です。

「命に関わる仕事をしたい」

父が昔医者をしていて、医者に関わる本を勧められ読んでいて興味は持っていました。決め手となったのは高校2年時の、祖母の死です。祖母が父に医者になって欲しかった、という話も聞いていましたし、その当時進路を悩んでいたのですが、それが決め手で人の命に関わる仕事をしたと思い、医者になることを決意しました。

「スポーツに関わっていきたく という気持ちから整形外科に」

大学時代は医学サッカー部で活動していました。最学年の時、東日本医科学学生総合体育大会に優勝したのが一番の思い出です。サッカーをやっていて良かったと思えたのは体力面と、礼儀も含め上下関係を学べたことです。今後ともスポーツに関わっていきたくという気持ちから、整形外科を希望しています。そもそも数ある医学部の中から筑波大学を選んだのは、体育専門学群があったからです。つくばカップで体育会の蹴球部と戦う機会があったのですが、やはり上手でした。努力面でも尊敬しています。

「半分以上が筑波大生という環境」

研修先の病院は、市内の病院を希望したり、地元で研修したりと選択が自由です。私は筑波大学の附属病院に勤務しています。周囲の半分以上は筑波大学出身の人ですが、他の大学からきた人もいます。彼らがイベントにも積極的に参加しているのに比べて、社交性がない訳ではないのですが……筑波大生は少しおとなしいなと感じます。長い間つくばにいたので、環境への慣れもあるかもしれませんが。

「人の体は 教科書どおりにはいかない」

医学類は細かい専攻には分かれず、全体で同じ講義を受けてひと通り医学に関する知識を学びます。一番記憶に残っているのは、2年次の6月から7月にかけてある授業です。半日実習があって、その合間に座学。実習では篤志によって提供していただいた献体を教科書を見ながら、順に解剖していきました。医学は6年+大学院で、4年次の秋から6年次の春は病院実習です。院は医師になって働いてから、また勉強し直すために行く人が多いです。正直、大学での学びが直接今役立っているという実感はあまりなく、医学においては、大学はあくまで基礎的な知識を学ぶ場だと感じています。覚えては学び、覚えては学び……の繰り返しで、身につくまでには時間がかかります。それにやはり人の体は教科書どおりではなく、皆違っています。実際に今働いてみて、やっと身につけてきているという印象です。



江田 香織さん

第二学群 人間学類 卒業
人間総合科学研究科 体育科学専攻 修了
国立スポーツ科学センター 所属



「アスリートが自分らしく 競技に取り組めるように」

現在、国立スポーツ科学センターや筑波大学体育系でアスリートの心理サポートやその研究を行っています。中学生のころから興味があった仕事に就けたことは私にとってとても嬉しいことです。アスリートの心理サポートは黒子のような仕事ですが、関わっている選手一人ひとりが自分らしく競技に取り組めるようになっていく姿を見ることは、何にも替えがたい喜びと充実感を覚えます。これ以上にやりがいのある仕事はないと思っています。

「中学の頃の悩みが原点」

私はずっと水泳選手としていろいろな試合に出ていましたが、中学生の頃、記録がうまく伸びずにとっても悩んでいたのです。そのときに相談できる人がたらいいなと思っていました。当時はまだカウンセラーが少なく、特にスポーツに関してはほとんどいませんでした。自分なりに調べてみると、スポーツ選手の悩みを聴く職業というものも確立されておらず、とりあえずは心理学を勉強する必要がありそうだとことが分かったので、心理学を勉強できる大学を目指そうと思いました。毎日水泳ばかりしていた私にとって、筑波大学はレベルの高すぎる大学でしたが、ちょうど人間学類がAO入試を始めた年だったので、思い切って受験してみることにしました。

「今までで一番楽しかった 部活動は大学時代かも」

水泳は高3の途中で辞めていましたが、水泳を辞めても何もやりたいことがみつからず、結局もう一度水泳を始めようと思い、大学1年の10月から水泳部に入れていただくことにしました。大学での水泳は、主体性を重んじられ、それまでのコーチから言われて練習する水泳とは全く違いました。水泳は個人競技ですが、筑波大学の水泳部は部員全員でインカレで勝つことを目指していたため、初めてみんなと戦っているような気持ちで取り組むことができ、今までで一番楽しい水泳生活でした。

「筑波大学は、 研究者を育てる大学でもある」

筑波大学は研究者を育てる大学でもあります。そのため大学3年次には、グループで1つの課題について研究し、論文を作成します。4年になると、実際に1人で研究し、卒業論文を作成し、卒業となります。この2年間では、研究に必要な方法的な基礎を丁寧にたたき込んでいただきました。そのおかげで私は大学院に進学しても、研究方法のことで困ることはほとんどありませんでした。

「多様性を受け入れる環境の中で、 社会に思いきり羽ばたく準備を」

私は人間学類でも超インレギュラーな存在だと思いますが、人間学類はそんな私をも許容する包容力のある学類です。また、筑波大学はさまざまな学類があり、自分が所属する学類以外の講義も受講できます。こういった多様性を受け入れる環境の中で、社会に思いきり羽ばたく準備をしてほしいと思っています。また、私の場合は水泳という一芸に秀でている（自分で言うのは変ですが）ことが身を救いました。AO入試はそういった人を受け入れてくれます。勉強するだけでなく、何か一つに夢中になって誰よりも貫いていることも、自分の身を救うことがあります。だから皆さんも、夢中になれることを探してみてください。



萩原 直樹さん

体育専門学群 健康体力学専攻 卒業
体育研究科 コーチ学専攻 修了
JOC（日本オリンピック委員会）所属



「日本にオリンピック・ ムーブメントを起こすのが仕事」

現在、オリンピックに関する活動を通じて、オリンピック・ムーブメントを推進しています。オリンピック競技大会で日本がメダルを獲得するだけでなく、オリンピックの価値である、「Excellence」「Friendship」「Respect」を国民の皆様に伝えることが現在の仕事の大きな使命だと感じ、取り組んでいます。また、仕事を通してたくさんの方々の笑顔に出会えることが私のやりがいとなっています。

「卒業してから出会う人々」

入学した時はあの広いキャンパスに圧倒され、初めの頃は迷ってしまうこともよくありました。入学当初、宿舎前にある桜の並木がきれいだったことが印象的で、よく覚えています。華やかな大学生活のスタートを感じました。そして卒業後は、さまざまな分野で活躍している筑波大学の卒業生に出会う機会が多くあり、それが卒業後のよい刺激となっています。初めて会った人でも、自分と同じ筑波大学を卒業した人なら、学年を問わず宿舎事情や筑波大学の特殊な環境についての共通の話題で盛り上がるのができます。話題のタネにもなるし、大学のコミュニティを感じられて嬉しいですね。

「人との出会いが財産」

筑波大学で得たものはいろいろありますが、一番は多くの友人に出会えて、楽しい時間を共有できたことです。大学の周辺に住んでいる学生が多い環境なので、友人たちとは深く関わることができました。また、総合大学なので広い交友関係を築きました。自分の学んでいる専門分野以外の友人も多く、学んでいる分野はそれぞれ違うので、多様な考え方に触れることができ、日々学ぶことも多くありました。今となってはそのことが自分の財産となっています。また、留学生や帰国子女など、世界へと視野が広がっている学生とも関わりを持つ事が多かったのも、オリンピックという国際的な異文化交流に携わる現在の職業に繋がる、良い影響を受けることができたと感じています。

「最も古く、最も新しい大学」

幼い頃から教師に憧れていました。筑波大学は日本で最も古い高等教育機関（師範学校1872年）をルーツに長い歴史がありながら、研究が盛んなつくば市に位置し、最も新しい情報を得ることのできる環境なのではないかと思いました。そんな環境で学ぶことが憧れでもありました。体育専門学群を選んだ理由は、自分の得意なスポーツの分野でその能力を試してみたいという気持ちが強かったからです。

「自ら課題を見つけ、整理し、解決する」

学群時代の4年間では、特に体育会活動を通じて1つのことに真剣に取り組む姿勢を学びました。大学院の2年間は、学群時代と違って自ら課題を見つけ、整理し、解決しなければなりません。この力は社会人になっても重要になってくるもので、今につながるプロセスを学べたと思っています。とても貴重な学生生活を送れたと思います。大学院時代に1年間語学留学したことも、グローバルに物事を考える現在の仕事に活きていると感じています。

「出会いの大切さ」

筑波大学での多くの出会いが、これからのあなたたちの人生においてかけがえのないものになるはずです。大学での出会いや学びを通じて、高い目的意識を持って、今やるべきことに真剣に取り組んでください。

「なる。」をもっと好きになる。

「なる。」を通して、伝えなかったこと。
「なる。」を通して、知ったこと。
編集長の独り言。



頼れるお姉ちゃん 08 筑波大学が気になる。 10 何になろうかな。 21 どんな大学生になるのかな。 22 筑波大学の住人になる。	沖繩産天然娘 30 気になる！筑波大学のキャンパスライフ 44 筑波大学で世界と もっと近くなる。 46 大人になる。ということ	編集長 01 なる。プロローグ 52 「なる。」をもっと好きになる。 55 なる。エピローグ	小峠大二似 00 表紙 22 筑波大学の住人になる。 ■ イラスト
---	--	--	---

「はじめに」

皆さん、初めまして！
本冊子「なる。」の編集長をしています。
芸術専門学群3年のゆっこです。

「なる。」は、芸術専門学群の学生4人からなる編集チームにより制作されました。これは創造学群表現学類という授業の中で制作されたものです。しかしながら、たくさんの方々のご理解とご協力のもとこうしてたくさん読者の皆さんと出会う機会をいただきました。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

これからは編集後記としまして、「なる。」の裏側をちょっぴりお見せしたいと思います。

「なる。」

まず最初は、そもそも何で「なる。」が生まれたのか、皆さんお気づきですか？

表紙のみならず、中身の「なる」という言葉

そこまで私たちがこだわり、大切にしてきた「なる」という言葉には、2つの意味が隠されています。一つ目は、筑波大生に「なる」。そして二つ目は、その後自分は何に「なる」のか。

「なる。」は、大学進学を目指す中・高校生に読んでもらおうべく、制作されました。筑波大生に「なる」ことを目標とする中・高校生に向けて。しかし、それは一つの通過点にすぎません。筑波大学は、その先にある未来を作っている場所です。あなたが望めば、必ず答えてくれるでしょう。

ぜひ、想像してみてください。筑波大生に「なる」自分を。そこで、自分は何に「なる」のか。

「リアル」

「なる。」は、実際に筑波大学に通う私たち学生によって制作されたものです。だからこそ、リアルでありたかった。私たちが知っている、等身大の筑波大学を伝えるために。良いところもそうでないところも、包み隠さず、ありのままを読者の方々に伝えること。

それが私たち学生が冊子を作る意味です。

そのため、取材への熱量は半端じゃない！！
OBOG含め、筑波大生約150人の思いがここに詰まっています。快く今回の依頼を引き受けてくださった筑波大生の皆さんに、改めて心よりお礼申し上げます。

正直なところ、膨大な取材量を前にひたすら心が折れ、毎日胃がキリキリする日々でしたが（笑）それでも、それに代わるものがありました。インタビューに協力していただいた方には、自己整理をする良い機会になったと逆にお礼を言われたり。モデルとして協力していただいた方々も、セッされたスタジオを初めて初めは緊張していましたが撮影をととても楽しんでくださって。完成楽しみにしてるね！！そんな一言が嬉しくて嬉しくて、ちょっとウルウルします。（笑）筑波大学の学群生・大学院生の力が集結した、素敵なコラボレーション冊子となりました。苦しいと言いつつも、振り返ると楽しい記憶しか出てこない。この不思議。（笑）

「なる。編集チーム」

最後は、なる。編集チームにまつお話を。

「はじめに」のところでお話したように、そもそも「なる。」は創造学群という授業の課題の一つにすぎませんでした。その講義を受講し、その中で編集に興味があったまるさん、ちゅんちゅん、あやめちゃん、私の4人が集まって、チームを組むことになったのが「なる。」の始まりです。

最終的に大学を含め、ここまで多くの人々を巻き込むことになろうとは、当初は想像もしておらず。課題の最終プレゼンで大きな評価をいただいたから、トーン拍子に話は進み、冊子という形で「なる。」を発行させて頂く機会を得ました。

私たちは、授業での時間を合わせる約3~4ヶ月。「なる。」と共に筑波大学を見つめてきました。そこで私たち全員が感じたのは、筑波大学が私たちにとって一つの家のような、大きな居場所であるということです。「大学に行くっていうよりは、大学に戻るっていう感覚なんだよね」とまるさんがふともらしていた言葉が妙にしっくりきました。大学周辺にほとんどの学生が住んでいるという、つくばの特殊な環境の影響はきっと大きいけれど、筑波大生にとって、大学は生活の一部になっているんです。最初の写真による導入の部分で、筑波大学=私の居場所という言葉を使ったのもそのためです。他大学を卒業してから、筑波大学に入学してきた同期の友だちが言っていました。「つくばで過ごす時間が、何倍も濃かった」と。それは筑波大学にしかない良さだと感じています。

また私たち自身の変化としては、書店で売っている雑誌を見て、「グロ吐きそう」が口癖になったことです。この一冊にどれほどの人が携わっていて、

どれほどの思いが詰まっているのか。それによりどれほどの睡眠時間が削られていったのか、それが垣間見えて吐きそうになるんです。（笑）

今回のプロジェクトは、私をひと回りもふた回りも成長させてくれました。そして筑波大学をもっと好きにさせてくれました。学生に力を貸してくれるこの環境と、チームの支えに感謝しています。

まるさんは芸術専門学群4年。「なる。」編集チームのお姉さん的存在。もともと仲良くさせていたでいた先輩ですが、今は本当に、何でも話せるお姉ちゃんって感じです。早朝4時、まるさんと二人編集作業に追われながら恋愛トークをしたのもいい思い出です。（笑）まるさんは面倒見が良く、他の企画のフォローはもちろん何かあれば電話でとことん話を聞いてくれて。最後まで、チーム全体を支えてくれました。縁の下の力持ち、誰よりも感謝したい人です。

あやめちゃんは芸術専門学群2年。沖縄産天然娘、その名の通りです。チームをいつもほっこりさせてくれます。あやめちゃんは言葉選びが上手で、私は敬意を込めてボエマーと呼んでいました。私が褒めるというも

「ゆっこさん、違うんです、私ほんとダメなんです……」ってあやめちゃんは言うんですけど。（笑）確かにマイペースなところもありますが、とっても頑張り屋さんで、素直な女の子です。

ちゅんちゅんもあやめちゃんと同じ、芸術専門学群の2年。編集チーム唯一の男子！（って感じを全く漂わせません。）最近坊主にしたせいで、小峠感が凄まじいです。ちゅんちゅんはイラストがとっても上手で、イラストが描けない私としては羨ましい限り。普段の生活ではバカなことばかりしてるんですけどたまたまちゅんちゅんと二人で作業をしていた時に、イラストに対する熱い思いを聞いて不意のギャップに感心させられました。（笑）やればできる子。ぜひそんな彼のイラストに注目して欲しいです！

「最後に」

「なる。」を手にとっていただき、ここまで、長くお付き合いいただきまして本当にありがとうございます。

最後まで楽しんでいただけたでしょうか？

「なる。」との出会いが、些細な何かのきっかけになれば幸いです。

ぜひ、たくさん読者の皆さんとはまだどこかで願わくば、ここ筑波大学でお会いできることを「なる。」編集チーム一同とても楽しみにしています。

なる。編集チーム / 編集長 ゆっこ

なる。

2017年 3月発行

編集長 福田雪子
編集 佐山円未
伊藤拓
内間あやめ

監修 岩崎友彦 森川幸人

発行 国立大学法人筑波大学 広報室

撮影 村上怜央

モデル 岩崎奈々美

取材協力 赤澤邦夫 高見美帆 三津家貴也 ミラー・オニール
江田香織 谷口ほのか 濱信乃介 コロビン・ニキータ
大滝遼 中村脩人 森本美生 ファンタネッラ・ピサ・パオラ
岡田賢斗 西園淳史 安永将太 マン・キ
駒田六花 西村海星 矢野千帆 ナブハン・ラルフ
小林樹 萩原直樹 吉村真紀 バンメンズ・レンス
鈴木健太 平井元貴 米満至織 ザラ・サスマタ・アウリラ
杉浦智理 牧野瑛美 ポック・ソバク

写真提供 伊藤香里 笠原萌 高山有希 速水一樹 Real jam
伊藤日向子 川端彬子 田中夏美 樋口青彦
大村美桜 工藤春樹 種茂誠至 藤田菜
加藤空 桑原拓巳 千葉瑞樹 三田あかね
小竹拓真 齋藤さだむ 網川椎菜 山ノ井梨沙子
小林樹 鈴木健太 中島康雄 山崎志帆
小室竜也 高見美帆 中島由紀夫 若菜美帆

撮影協力 筑波大学附属図書館（中央図書館）

印刷 三共グラフィック株式会社

本誌掲載の記事、写真等の無断複製、複写、転載を禁じます。
Copyright by University of Tsukuba 2017
Printed in Japan.



Art &
Design

ねえ、あなたはなに「なる」？



